

[共同研究：社会調査方法論およびデータ解析法の研究]

## 社会調査テキスト作成の試み(1)

——社会調査の基本ルールと基本の道具——

木 下 栄 二\*

### はじめに

本稿は、社会調査テキスト作成に関する試みの中間報告である。

桃山学院大学社会学部では、2年次に「社会調査」を学部必修として1クラス100人前後で複数開講するほか、3年次以上の学生に対してはゼミ形式の「社会調査実習」を設けて「やる気」のある学生に実際の社会調査プロセスを経験させるなど、社会調査教育に力を入れている。このような環境のなかで、1996年度より共同研究プロジェクト「社会調査方法論及びデータ解析法の研究」(96共114)が教員有志によって始められた。この一環に、学外の協力者も含めての社会調査テキスト作成の試みがある<sup>1)</sup>。

現在、社会調査テキストは数多く出版されているが、必ずしも大学生への社会調査教育のために十分なものとは言えない。たとえば、技法の解説が調査現場の実際と乖離していたり、現在の文系大学生の多くが数学を苦手としている現状を軽視して、確率・統計の知識を前提としたテキストが多く、やたら学生の「苦手意識」を助長している。また、社会調査とは何か、社会調査の前提となる問題構成、仮説構成などの説明が不十分あるいは難解すぎるものが多く、社会調査に対する「誤解」を招きやすい。そのため、社会調査教育が他の社会学教育と有効にリンクせず、卒論研究などにも十分に活用されないという問題状況も生じている。

\*本学社会学部

1) テキスト作成作業にあたっては、関西学院大学の太谷信介教授、日本大学の後藤範章助教授、松山大学の小松洋助教授、永野武専任講師の各先生方にもご協力いただいている。記して感謝の意を表したい。

本稿では、上記後半の問題と関連して、社会調査の前提となる基礎的な考え方を、どのようにしたら適切に学生諸君に伝えられるかという観点から実験的に執筆した章を掲載する。この章は、調査諸技法の解説の前に社会調査の基本的考え方を述べる部分で、通常、テキストの第1章ないし第2章に置かれる。ここで意図したことは、次の2点である。

第一に、「読み物としてのとっつき易さ」を考慮して、かなり崩した文体を用いたほか、スポーツに喩えての説明や、「恋愛」「マナー」など身近な例を用いた説明を試みている。

第二に、「どのように社会調査をするか」よりも「どのように社会調査の結果を読むか」を重視した。そのため、重要なタームについて従来と若干異なった説明も試みている。例をあげれば、社会調査の定義も、従来一般的である定義<sup>2)</sup>ではなく、むしろ実証的社会学の定義に近いものを採用している。また、記述と説明の違い、社会的問題構成を強調して、調査結果の適切な理解の基礎的なポイントに注意を喚起している。さらに、仮説についても、一般的説明ではなく、調査結果の読み取りを考慮した説明に限定している。

本稿は、上記のような意図のもと、社会調査の前提となる思考法を、いかにテキストレベルで学生に伝えられるかに関する試行錯誤の報告である。テキストには掲載予定の図表・コラム

2) 「一定の社会または社会集団における社会事象に関するデータを、主として現地調査によって直接蒐集し、処理し、記述(および分析)する過程」(安田・原(1984)『社会調査演習』東京大学出版会、3ページ)などが、従来の社会調査に関する定義として有名である。明らかに「調査をする」という点に重点が置かれている。

を略したため説明不十分な箇所があるほか、論述内容も限定した視点に偏り過ぎているかも知れない。しかし、コンピューターの急速の発達によって手軽に大量データの解析が可能になった反面、住居形態の変化、社会関係の希薄化、プライバシー重視の世相はかつてのような社会調査の実施を困難にしている。社会調査を巡る環境が変化するなか、大衆化する大学において、社会調査教育はどうあるべきかという議論の必要性は増大している。本稿の最大の目的は、この議論のために一つのたたき台を提供することにある。

#### ☆社会調査の基本ルールと基本の道具

目的：「さあ社会調査！」と意気込んでみても、やみくもにデータや資料を集めるだけでは頭の中が大混乱するのが関の山。そんなことでは、ほかの人の社会調査の結果だって理解できるわけがない。スポーツにルールや道具があるように、社会調査にだってルールもあれば、必要な道具もある。

この章では、まず社会調査というゲームを楽しむ基本ルールと基本の道具について説明しよう。ただし、道具といっても野球のグローブや剣道の竹刀のように目に見えるものではない。それは目に見えないが絶対必要な論理上の道具、記述と説明、問題、概念、変数、仮説などである。

キータム：記述と説明、概念、操作的定義、変数、仮説

#### (1) 社会調査の基本ルール

A. 社会について考える：野球のルールは難しい。ルールブックという本があるくらいだが、ルールブックを丸暗記せずとも野球を楽しむことはできる。細かいことは後回しにしても、どうすれば得点になるかさえ知っていれば、たいのスポーツは楽しめる。

社会調査だって、細かいルールをいくら知っていても、どうすれば得点になるのかを知らね

ば楽しめない。それでは社会調査における得点とは何か？ それはズバリ「社会について考える」ことである。いくらボールを上手に蹴ってもゴールが決まらなければサッカーの得点にならないように、いくら上手に調査をしたって、そこから「社会について考える」ことができなければ、社会調査で得点をあげたことにはならない。つまり、社会調査の目的は、「社会について考える」こと。何はともあれ、これが一番大事なことだ。

B. データや資料を集めて考える：サッカーもハンドボールもゴールを目がけてシュートを放つ。しかし、ゲームの内容は随分違う。腕を使ってシュートをしたら、サッカーではたちまち反則でレッドカードだ。

「社会について考える」場合も同じこと。先人の思想を学んだり、じっと座って瞑想に耽るのも大切だが、それでは社会調査になりはしない。なんてたって調査と言うくらいだから、データや資料を集めてこなきゃ始まらない。データや資料の集め方はいろいろあるし、集め方にもルールはある。しかし大切なことは、あくまでも「社会について考える」ためにデータや資料を集めることにある。つまり、社会調査とは「データや資料を集めて、それに基づいて、社会について考える」ことなのだ。

C. 考えるとは Part 1＝記述する：プロゴルファーだって、ホールインワンなぞそうはだせない。刻んだり、かっ飛ばしたり、時には砂地や池ポチャに苦しみながら、とにかくボールをグリーン上に乗せることが最初の課題。グリーンにのったらのったで、パットに悩みながら小さな穴にボールを落とすという至難の課題が待っている。

社会調査でも事情は一緒。「データや資料を集めて」、それに基づいて「社会について考える」という二つの課題をこなさなければならない。まずは最初の課題、「データや資料を集める」ことだが、実は集めただけでは役に立たない。集めたデータや資料をもとに、「フムフム、実は世の中こうなっておったのか」とか「オヤオヤ、世の中こんなこともあったのか」ということを

記述して、自分にもほかの人にもわかる形にしなければならないのだ。ボールがグリーンにのらなければプロゴルファーだってゴルフにならないように、集めたデータや資料が、どんな事実を物語っているのか記述できなければ社会調査になりやしない。つまり、「考える」ための出発点にはいつも、データや資料に基づく正確な事実の記述が必要なのだ。事実を記述しようもしない思い込みの空論など、いくらこねても屁の役に立ちほしない。

**D. 考えるとは Part 2=説明する：**ボールがグリーンにのったとしても、まだまだそれだけでは終わらない。ボールをホールに入れてナンボのものだ。

社会調査だって、事実を記述しただけでは終わらない。なぜ、「世の中こうなっておるのか」、どうして「世の中こんなこともあるのか」を説明しなければ、「社会について考える」ことにはならないだろう。つまり、事実を記述して、その記述の内容を、「なぜ？ どうして？」と考えて、「だからこうかも知れない」「いやいや、あかかも知れない」と説明までしてはじめて得点となるわけだ。

**E. 記述と説明は別のもの：**どんなプロでも調子を崩す。いわんや初心者の場合、余計なところに力をいれてしまって、自分の首を絞めてしまうことはよくあることだ。

社会調査でよくある間違いの一つに、記述と説明の混同がある。データを見たとき勝手に気負い立ってしまって、冷静な記述をないがしろにして思いこみの説明を始めようとする人が多いのは困ったことだ。「世の中こうなっておるのか」という事実も記述できずに、いきなり説明なぞできるわけもない。たぶん、そういう人はどんなデータや資料が集まったって、自分の言いたいことしか言わない人なのだろう。まるで、「あいつが犯人」と決めたら、証拠もないのに無理やり自白させようとする、テレビや小説にでてくる困った刑事さんのように。

記述と説明は別のもの、記述なき説明はむなしく危険であり、記述と説明の混乱ほど惨めで愚かなことはないと肝に銘じておこう。

**F. ところで「社会」って？：**足も速いし腕力も強い。運動神経抜群だと思いきや、ボールをもたせたらまるでダメという人もいる。逆に、駆けっこや喧嘩は苦手だが、スキーはすごく上手という人もいる。スポーツにもいろいろあるから、運動能力とある種のスポーツができることとは、必ずしも一致しないのが世の中の面白いところだ。

スポーツにいろいろあるように、社会と言ったっていろいろある。「社会について考える」と言っても、いきなり社会のすべてを対象にしても混乱するか、悟りの境地に至るかのどちらかだろう。それに、社会調査の目的は、「社会とは何か」を考えることではなく、「社会について考える」ことなのだもの。

有り難いことに、「社会」とは複雑で、いろいろな要素がこんがらがってできている。おじいさんも、お姉さんも、坊っちゃんもいる。威張っている人もいれば、謙虚な人もいる。天下国家が大切な時もあれば、隣家のピアノの音が人生の大問題になる時だってある。ここは一つ、「社会とは何か」を難しく考える前に、「社会」の中から、その部分部分を取り出して、しっかり事実の記述と説明に励もうではありませんか。スポーツの中に、サッカーや野球、あるいはゴルフだスキーだといろいろ面白そうなのがあるように、「社会」にだって「環境問題」や「福祉問題」、あるいは「恋愛から見る現代社会の諸特徴」「たばこの投げ捨てにみる現代人のマナー意識」とか、面白そうな社会問題や研究テーマがいくらかもあるのだから。

**G. 社会調査の基本ルールのおさらい：**おさらいです。社会調査の基本ルールとは、

(1) 社会調査とは、「データや資料を集めて、それに基づいて、社会について考える」一連の作業のことである。

(2) 「考える」ためには、記述と説明の二つがある。二つは別物で混同してはならない。

そして、実際に社会調査を楽しむには、社会の中のどんな問題を扱っているのかわかっていなければならない。問題も立てずに物事を考えることはできないし、問題がしっかり把握でき

ていなければ、的確な思考などできるわけがない。つまり、どういう問題を立てて社会調査をするのか、あるいは調査結果を読むか、それが大問題なのだ。

## (2) 問題が問題だ—社会的な問題構成へ—

**A. 問題は解くものにあらず、作るものなり：**大人と子どもの違いはいろいろある。「自分で問題をつくれるかどうか」もその一つ。これは受験勉強と、大学や社会に出てからの本当の勉強との違いでもある。受験勉強で使う問題集なんて、誰かが問題も答えも作ってくれている。受験生は意地悪にも隠されている解答を、あの手この手で探すだけだ。しかし、大学ではまず問題を自分で作ることを要求される。いわんや社会に出たら、解答付きの問題集なんて親切なものなどどこにもない。

社会学は大人の学問であり、社会調査は大人の研究方法である。親切な問題出題者がいて、解答も用意されているなんて生易しいものとは訳が違う。何を研究したいのか、何を調査したいのか、自分で決めなきゃ始まらない。なにしろ世の中困ったことに、問題なくして解答なし。解答だけで問題が存在しないなんてことあり得ない。

**B. はじめに問題意識ありき：**「住民の福祉ニーズを知らねば」「我が社のイメージはどうなっているのか」などとすでに問題を抱え込んでしまった人は幸せである。「問題を作れって急に言われてもわかんない。受験勉強だって苦手だったのに」という御仁も多かろう。しかし、心配はいらない。人生悩みは尽きないし、世の中には問題が満ち溢れている。「どうして彼氏ができないの」「どうして俺は貧乏なんだ」「若者はマナーがなっとらん」「今の政治は腐っとる」など悩みや怒りの一つくらい見つかるものだ。そして、あなたの抱える悩みや怒りを、ちょっとだけ冷静になって見つめ直してみよう。悩みを怒りをそのままにしておいてよいのか？ いや、よいはずはない。何とかして解決の糸口を見つけねば。するとアレ不思議、そこにはある問題に挑戦する意識、つまり問題意識があるじ

ゃありませんか。

**C. 社会調査は万能にあらず：**「どうして私に彼氏ができないのか解明してみせるわ」と問題意識に燃えた貴女。残念ながらそういう問題設定に対して社会調査がお役に立つかどうかは自信がない。

社会調査の効能は「社会はどうなっているのか」を知ることにある。量的調査（アンケート調査など）では「彼氏のいない人はどのくらいいるの」「外見だけで彼女を選ぶ男の子の比率はどのくらい」といった情報や、情報を組み合わせて「彼女のいない男の子って、面喰いな奴が多いのね」なんていうことから「社会はこうなっているか」という概観図を作ってみたりする。質的調査（ヒアリングや事例法など）では、「こんな恋愛もあったんだ」とか「こんな趣味の人もいるのね」とかを見たり聞いたりして、「社会ってほんとはこういうこともあるのね」と思って世界観を広げたりする。作った概観図や、広げた世界観が正しいかどうかは別問題として残るが、とにかくにも「社会はどうなっているのか」を考えるには、社会調査はかなり効く。

しかしである。だからと言って「どうしたらあなたに彼氏ができるかどうか」はわからない。だってそれはとても個人的なことだもの。あなた個人と社会は決してイコールではないはず。まことに遺憾ではありますが、個人的な問題に対しては、社会調査はほとんど効かないということも覚えておいてくださいね。

**D：大人は社会を考える：**「なあ～んだ、社会調査なんて私の役に立たないのね、バカバカバカ」と思った人もいるかも知れない。でもそれじゃ、自分のことしか考えない我侷なガキと一緒に。もう大人なんだから、広い気持ちで社会のことも考えてみよう。

社会のことを考えると云ったって、社会は遠い遠い海の向こうにあるわけではない。私がいて、あなたがいて、あの人もいて、それで社会は出来ている。少し発想を転換するだけで、たいていの個人的な問題は社会的な問題に繋がっていく。たとえば「どうして、私は彼氏がいなくて悩むのだろう」と問題を切り替えたら

どうだろう。そう思って、社会調査でできる概観図や広げた世界観を見直せば、「彼氏のいない人って多いのに、どうして私は悩んでいたのだろう。私を悩ませる別の仕組みが社会にあるはずだ」と思い直して、マス・メディアにおける恋愛描写の分析を始めたり、「おばあちゃんの世代って、恋愛ってご法度だったんだ。じゃ、今の社会と昔の社会はどう違うのだろう」って具合に、現代社会を相対化して考えたりできないだろうか。つまり、「私のことを悩ませる社会っていったいどうなってるの」とあなた自身の問題を越えて、あなたを取りまく社会のことを考えることができるじゃありませんか。

自分のことしか見えない人には、どんなに科学的装いをまともにも社会調査でポイントは取れません。私が入って、あなたもいるし、あの人もいる。そしてみんなで社会を作っていて、みんなが社会の中で生きている。どんなに辛くとも、この感覚(まさにチャールズ・ライト・ミルズが「社会学的想像力」と呼んだもの)をもっていることこそが大人の証。この感覚なくしては、調査のテクニックも統計学も無意味だ。「問題なくして調査なし」「社会的な問題構成なくして、社会調査なし」なのだ。

### (3) 「概念」なんか怖くない

A. 概念なくして事物なし：さて問題意識が出来たとしても、人間とは不便なものだ。人間同士でコミュニケーションをしようとする時も、一人ぼっちで考える時も、「はじめに言葉ありき」である。そして言葉は何らかの事物を表し、言葉にできないことを考えたり、人に伝えることはとても難しい。そして言葉が何を表しているかを真面目に考え始めたとき、**概念(concept)**という言葉が登場する。

さて、たまには小説なぞも読んでみよう。だって、小説はまさに言葉の宝庫。次の1文は、村松友視の『泪橋』という小説の中の1節である<sup>3)</sup>。

北国に育った秋子は、工藤と一緒に住むようになったころにはゴキブリというものを知らなかった。

「東京って、台所にコガネ虫がいるのね」

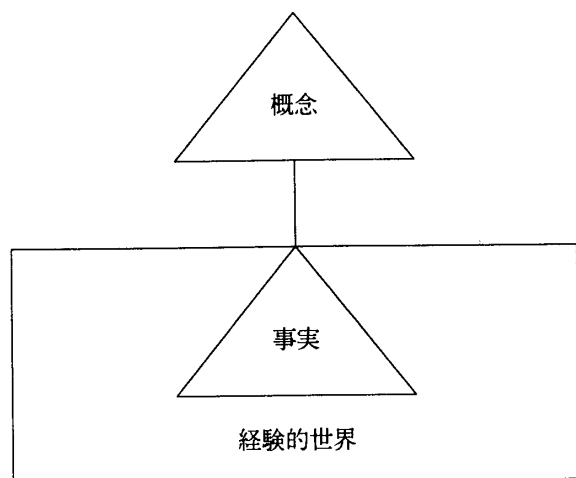
最初はそんなことを言ってもめずらしそうにゴキブリを見ていた様子だったが、そのうちたちまちゴキブリを目の仇にするようになった。ゴキブリとの格闘が、秋子にとって東京という大都会の生活の代名詞であるかのようにさえ感じられた。

たとえ部屋中にゴキブリの大群が溢れていようとも、ゴキブリという概念さえ知らなければ、秋子さんの東京生活ももっと過ごし易いものになったであろう。

つまり、概念なくして事物なし。どんなモノノケが目の前でのたうちまわろうが、それを指し示す概念を知らねば、怖くも面白くもなともない。高根正昭<sup>4)</sup>によると、「我々が普通「事実(fact)」と呼ぶものは、実は「概念(concept)」によって経験的世界(empirical world)から切り取られた、現実の1部にほかならない。」ということになる。つまり図1のように、どんな事実があろうとも、概念がなくては事実として浮かび上がってくることはできない。概念とはそれほど凄い奴である。

### B. 概念を意識して使おう：逆に考えてみよう

図1 概念と事実の関係

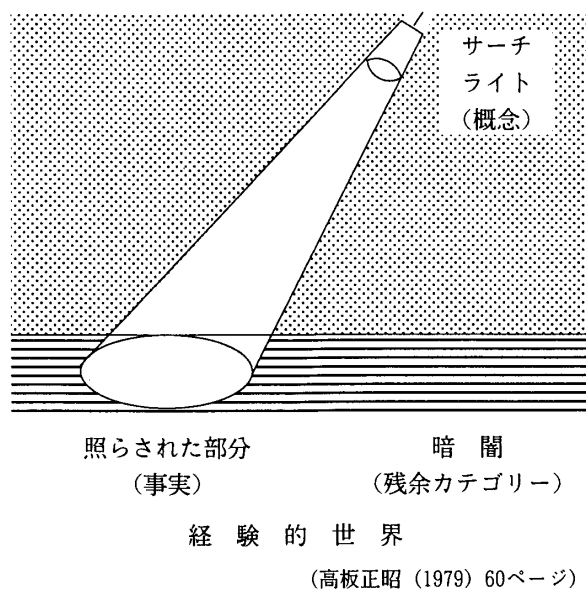


(高根正昭(1979)59ページより)

3) 村松友視(1983)『時代屋の女房・泪橋』角川文庫, 113-114ページ。

4) 高根正昭(1979)『創造の方法学』講談社現代新書, 59-60ページ。

図2 概念と事実と残余カテゴリー



う。概念なくして事物なし。それならば、事物を知るためには、概念を知らねばならない。たとえ概念さえ知らなければ、人生をもっと幸せに生きていけるとしても、言葉に頼るしかない我々は、概念なくしては物事を理解することも、人に伝えることもできないのだから。

さきの高根正昭は、有名な社会学者のタルコット・パーソンズに依拠しながら、図2のように、概念をサーチライトに譬えている。暗黒の中ではサーチライトに照らされた部分しか見ることができない。経験的世界という暗黒の中から、概念というサーチライトに照らされた部分だけを我々は事実として認識できるのである。

普段は概念なんて小難しい言葉を意識しないで生きる方が幸せかも知れないが、何かを調査するとき、そして何かを人に伝えようとするとき、概念は使わざるを得ないのだ。つまり、社会調査というゲームを成り立たせているプレイは、概念を意識的に使って、事実を認識していく作業とも言えるのである。

**C：概念の定義：**秋子さんがゴキブリという概念を知らなかったように、どんな概念でも誰でも知っていて、誰にでも伝わるというものではない。ましてやゴキブリのように実態のあるものとも限らない。例えば、「どうして俺は貧乏なんだ」とお嘆きの諸兄、貧乏と言う概念も随

分と難しいものだということをご存じだろうか。

ブランドもので身をかためた女子学生に「先生、今日あたし貧乏なの。何かおごって」と言われて腹を立てながらもキャッシュカードでお金をおろす場合もあるだろうし、家族に不幸が続いて学費を払うことができなくなった学生に「先生、すいませんが貧乏のため、残念ですが退学します」と言われて奨学金給付や学費減免の掛け合いに走る場合だってある。言葉は同じ「貧乏」でも、その中身はかなり違う。

日々の生活の中で、仲間達と話したり、一人でブツブツ言うときには、どんな言葉、つまり概念をどんな意味で使おうと勝手だが、概念を意識的に使って事実を認識していこうとする場合には、概念の中身はかなり明確に決めておかねばならない。そして、概念の中身を言葉で説明できなければ、ほかの人に伝えることができなくなる。

つまり、**概念の定義**とは、概念の中身はかなり明確に、その概念以外の言葉で指し示すこと。一般的には、辞典や辞書が概念定義のかたまりである。社会調査（実は、学問すべて）では、概念の定義はとって大事な作業だ。これを知らない者はキャッチャーに向かってバットを構える奴と同じくらい向こう見ずな奴なのだ。

**D. 概念の操作的定義：**野球のボールとサッカーのボールがまったく違うように、概念の定義の仕方にも実はいくつか種類がある。「貧乏とは、貧しく、ものが乏しい状態」と定義したところで、定義としては間違いではないが、それでは調査の役に立ちもしない。調査に役立つように概念を定義すること、それを**概念の操作的定義 (operational definition)**、あるいは**概念の操作化**と呼ぶ。

ここで社会調査の歴史上もっとも重要な人物を紹介しよう。彼の名はチャールズ・ブース、19世紀のイギリス人で近代的社会調査の基礎を作った人物の一人である。彼はロンドン貧困調査で名高いが、この調査の画期的な点の一つに、「貧乏」を操作的に定義して、はじめて「貧乏」を調査によって客観的に把握したことがある。

19世紀に繁栄を極めた大英帝国の首都ロンド

ンでも貧困はあった。ある人々はロンドンの人口の25%は貧民であると主張していた。しかし、ほんとにそうなのだろうか？ ブースは貧困を客観的に測定するために貧民の定義を行った。すなわち貧民とは「標準的な大きさの家族で週当り18シリングから21シリングというような、わずかではあるが十分規則的な収入のある人々、…彼らの収入は十分であるかも知れないが、それはかろうじて十分であるにしかすぎない。」<sup>5)</sup>

なんのことはない。これだけのことだが、コロンプスの卵とはまさにこのことである。「貧乏とは、貧しく、ものが乏しい状態」といったところで、「俺は貧しい」「いや、私の方が、乏しいわよ」と各自勝手に主張するだけだが、これだけはっきり軸と基準が決められてしまえば、もはや勝手な主張は許されない。いやが応でも、貧民とそうでない人たちに区分されてしまう。

収入と家族の大きさに構成されるこの定義には、異論があったかも知れない。「収入よりも資産が重要では」と軸を問題にしたり、「22シリングだって貧民よ」とか基準を問題にするという風に。これは「構成概念妥当性」という大事な議論であるが、操作的定義にとっては研究の発展のために名誉でこそあれ、汚点ではない。

つまり大切なことは、ブースが貧民をこのように定義したことによって、貧民をはじめ客観的に把握できたことである。イメージや空想を越えて、「貧困」という現実を調査によって把握し、はじめて「貧乏」という問題を社会的に考えることを可能にしたのである。ちなみに調査結果は、なんと30%が「貧民」かそれ以下であり、貧困対策が社会的な問題として、大英帝国の政治を変えていくことになったのである。

#### (4) 変数は変な数ではない

A. 分類という発想：「どうして俺は貧乏なんだ」とお嘆きの諸兄、あなたは本当に貧乏だ

ったろうか。貧乏を操作的に定義した場合、自分で何と思うが、ある軸と基準に基づいて「貧乏か、そうでないか」に区分されてしまう。あるいはトランプゲームのように、「大富豪、富豪、平民、貧民、大貧民」のどれかに区分されるかも知れない。

人間のことを区分するとは、神をも恐れぬ所業だが、現実には様々な基準で日常的に人間は区分されている。「男と女」と言えば性による区分であるし、「おじさん」という言葉は、年齢による区分を背景にしている。そして、ある基準に基づいて人間や物事を区分することを分類という。不幸なことだが、分類という発想なくして社会調査は成り立たない。分類なくしては、社会の概観図も世界観もノッペラボウの白紙となってしまうだろう。

B. 変数という概念：ここで我々は新たに変数という言葉を知らなくてはならない。変数と言っても何も変な数ではない。「変化する値をとる概念」だから**変数(variable)**と言うのである。例えば、「身長」はその中に153センチも170センチも含んだ立派な変数だ。また、「男」といってもそれだけでは変数ではないが、「性別」と言えば「男か女か」という分類をその中に含んだこれもまた立派な変数である。つまり、その意味内容が分類可能な概念ならば、すべて変数となれるのである。

C. 変数化する概念：さて「男とはなんぞや」といっても変数ではないが、しかし「いいオトコ」と言ってしまうと、その瞬間に「オトコ」も変数化する。つまり「いいオトコ」と「それ以外のオトコ」という区分が生まれて、「俺はいいオトコの方に分けてもらえるだろうか」という不安とあきらめとともに分類も可能となる。

また「ファッション」という概念を考えてみよう。世の中には様々なファッションが満ち溢れている。「趣味のいいファッション」も「シックなファッション」もあれば当然その逆もある。ちょっとした形容語句(趣味がいい・シックな)がつくだけで、ファッションも変数となる。しかし、「趣味がいい」と「シック」とはイコールではない。同じくファッションを変数化すると

5) G・イーストホープ(川合隆男・霜野寿亮監訳)  
(1982)『社会調査方法史』慶應通信、60ページ。  
(原典：Gary Easthope. (1974), *A History of Social Research Methods*, Longman Group Ltd.)

いっても、「趣味がいいか・悪い」と「シックか・そうでないか」では観点が異なるのだ。どんな観点から概念を変数化するか、つまりどんな軸を立てて概念の内容を区分するか、ここはまさに注意の為所である。

さらに言えば、何をもって「趣味がいい」と言うのだろうか？ 自分の趣味の押しつけだけでは困ります。客観的に他の人にもわかるように決めておかねばならない。つまり分類の基準をどうするか、大きな大きな注意の為所なのである。

さあてこれで気づいたかな？ 概念を変数化するとは、多くの場合、概念の操作化と同じこと。逆に、概念の操作化とは、ある観点から（つまり軸を設定して）概念の内容を区分し、客観的に区分可能なような基準を作ることなのだ。そして、軸と基準を言葉で明示することが、つまりは概念の操作的定義となる。

#### (5) 仮説は花形

A. 問題です：概念と変数は理解できたかな？ まあ、焦ることはない。例をあげて考えてみよう。ところで「若者はマナーがなっとらん」とお怒りのあなた、もしも「オジンやオバンの方がマナーができてないじゃん」と反論する不埒者がいたらどうしますか？ 反論されて黙っている奴は卑怯者だし、大声で相手の発言を封じようとする者は民主主義の敵だ。ここは一番、勇気をもって自分の意見が正しいか、間違っているのか立証することで、不埒者に立ち向かおうではありませんか。

問題を整理しよう。要するに「問題です。若者と年長者と、どちらのマナーが悪いのか？」ということだ。ほらほら、もうここに概念と変数が見え隠れ。「若者と年長者」とは年齢の高低による区分であって、年齢という変数がマナーの善し悪しに関係していることになる。おっと、マナーだって善し悪しがあるのだから変数ではないか。ところでマナーって一体何だろう？ 調査可能に、さらに善し悪しの区分もできるように操作的に定義してやらねばならないな。ね、概念も変数も大事でしょ。

B. 問題は疑問文、仮説は肯定文：この問題をもう少しこまかく検討してみよう。「若者と年長者」とは「年齢」という変数の区分だし、「マナーが悪い」も実は「マナーの善し悪し」という変数の一区分である。そこで、より一般的に問題を書き直すと「年齢によってマナーの善し悪しは異なる」となる。そして、この内容として「若者の方がマナーは悪い」と「年長者の方がマナーは悪い」の二つがあって、あなたは前者を支持し、不埒者は後者を支持しているという図式が明らかになる。

ただし、勝敗を焦って忘れてもらっちゃ困るのが、若者も年長者もどちらも同じくらいマナーが悪かった場合である。スポーツに引き分けがあるように、あなたも不埒者も痛み分けということだってあるのだ。つまり、「年齢によってマナーの善し悪しは異なる」ことこそが、まず確かめられなくてはならないのだ。

ここで我々はずいぶん仮説という、社会調査の花形に出会ったのである。「若者と年長者と、どちらのマナーが悪いのか？」という疑問文に答えるためには、第一に、「年齢によって、マナーの善し悪しが異なる」という肯定文が正しいことを立証しなければならない。そして「年齢によって、マナーの善し悪しが異なる」つまり一般的に書けば「Xによって、Yの内容は異なる」、もっと一般的に書けば「Xの変化にともなって、Yも変化する」というこの肯定文、そしてこれからその真偽を問おうとしているこの肯定文こそが、我々が花形、仮説 (hypothesis) なのである。そして、「若者の方がマナーは悪い」というあなたの主張は、この仮説における3つの可能性の一つと位置づけられる。

さて、ここで問題と仮説の使い方の要点を整理しておこう。

- ①問題は、問題というくらいだから疑問文の形にしなければならない。
- ②問題を整理するとは、変数と変数との関連の形に記述し直すことである。
- ③変数と変数との関連に書き直した問題を、肯定文に変えたものが仮説となる。
- ④問題の前提となる主張は、仮説のもつ3つ



の可能性の一つと位置づけられる。

ね、簡単に論理的でしょ。どんなときでも忘れないでね。

C. 独立変数と従属変数：さて、仮説に関する補足的な注意も述べよう。「年齢によって、マナーの善し悪しが異なる」つまり「Xの変化にもなって、Yも変化する」という仮説には、二つの変数があるが、それぞれの変数には名前がある。X(例では「年齢」)は、**独立変数 (independent variable: 説明変数とも言う)**と呼ばれ、Y(例では「マナーの善し悪し」)は、**従属変数 (dependent variable: 被説明変数とも言う)**と呼ばれている。つまり、独立しているのはXの方であり、Yはそれに従属しているわけだ。たしかに年齢が変われば、マナーも良くなったり悪くなったりするかも知れないが、マナーをどうしようと年齢が変わるとは思えない。マナーを悪くすれば若者になれるのなら、おじさんはぐれてやる。問題や仮説の中にある二つの変数には、関係があって名前のあることを覚えておこう。

D. 仮説を構成する3つ以上のセンテンス：仮説を実戦の場で使いこなすためには、仮説を少なくとも3つ以上のセンテンスから構成する必要があることも覚えておこう。さきの例で言うならば、第一センテンスは、まさに仮説であって「年齢によって、マナーの善し悪しは異なる」である。これがなければ始まらないが、よく忘れ易いので嚴重注意。第二センテンスでは勝負を賭ける。つまり「若者の方がマナーは悪い」というあなたの主張が置かれなければならない。第一センテンスの仮説だけでは、独立変数と従属変数との関連の仕方がわからない。問題意識が大事だって言ったろ。勝負に出ずにどうするの。

さて、最後の第三センテンス以降には、第一、第二センテンスの理由を書こう。どうして、「年齢によって、マナーが異なる」と考えられるのか、どうして「若者の方がマナーは悪い」ということが成り立つのか、勝負するからには堂々と理由をつけておこう。この理由こそが先に述べた説明に対応する。「人間は年齢を重ねるに連

れて、社会のルールをよく身につけるので、若者より年長者の方がマナーはよい」と考えるのか、「今の若者は、物質的には豊かだが、受験勉強など詰め込み教育しか受けていない。他人を思いやる心や世の中のルールについて教わっていない。だから、最近の若者はマナーがなっていないのだ」と考えるかで、同じ「若者の方がマナーは悪い」と言っても、その説明の図式は異なってくる。仮説に理由をつけることもできない奴には、調査結果を見たって説明なぞできやしない。だから、仮説は、その理由も言い表すことができはじめて完成なのだ。

E. 最後に再び「記述と説明」：最後に再び記述と説明について考えたい。上記の例で、なんらかの調査を実施して、「若者の方がマナーは悪い」という結果が出たとしよう。本来は、どのような調査で出た結果なのか、調査方法は適切か、さらに概念の操作化は妥当なのか、いろいろ考えねばならないことが多くて簡単に結果を述べることはできないのだが、とりあえず「若者の方がマナーは悪い」という結果は事実だとしよう。ここまでが記述である。記述は事実を記述する。そして、記述だけで終わっては「社会について考える」ことにならない。「なぜそうなのか」を説明しようとしなければ、社会調査として片手落ちというものだ。

しかし、説明は事実ではない。先述の二つの理由で考えてみよう。同じ結果を受けて、前者は「年を取ればみんな変わるさ」とゆったりとし、後者は「心の教育が大切だ」などと慌てふためいたとしたら、どちらもたいへんな愚か者である。まさに記述と説明の混同とはこのことである。前者も後者もある事実を説明する可能性の一つに過ぎない。「若者の方がマナーは悪い」と記述しても、「なぜそうなのか」については、実はまだ何もわかっていないのだ。

説明は事実ではない。ある事実を説明する新しい仮説への道を開く鍵なのだ。「年齢」がマナーをどれだけ規定するのか、あるいは「心の教育」がマナーをどれだけ左右するものなのか、説明とは新たな仮説と新たな社会調査への出発点である。